

発表タイトル	古代日韓における彫金技術の変遷と意味
発表者所属名	日本歴史研究専攻
発表者氏名	金 跳咏

【研究の目的】

日本列島における古墳時代（韓国の三国時代）の墓からは、土器や鉄器、金工品など様々な遺物が出土している。この中で、金、銀、銅などを使った金工品には派手な文様と文字が刻まれている。^{たがね}鑿を用いて金属の表面に文様と文字を彫る技術を「彫金技術」という。

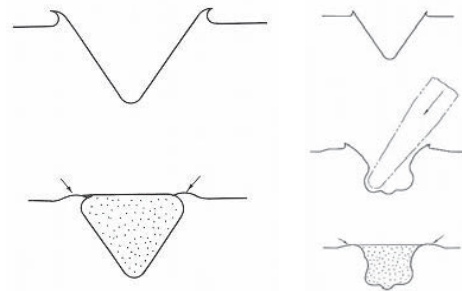
本研究では、このような彫金技術の中で、特に鉄に文様や文字を刻む象嵌技術について考えていきたい。4～6 世紀における朝鮮半島と日本列島で製作された象嵌遺物の観察を通じて、当時の日韓関係の一断面を明らかにすることが本研究の目的である。

【象嵌とは】

象嵌とは、金属に異なる金属を嵌め込む技法である。古墳時代（三国時代）に限れば刀身や刀装具、または馬具などの鉄製品に金、銀、銅を定着させる技法をいう。現代における象嵌には、線象嵌、面象嵌、切象嵌、布目象嵌などがあるが、古墳時代には主に線象嵌が行われていたと考えられている。

【象嵌の技術】

古墳時代（三国時代）の象嵌は、鉄で作られた刀剣に溝を彫り、その溝の中に金銀の線を嵌め込む線象嵌が多い。しかし、彫った溝に金銀の線を嵌め込むだけでは、金銀が抜けてしまう危険性が高い。そこで、溝を彫る時に立ち上がり（カエリ）を立て、金銀線を入れた後、立ち上りを被せる



【図1】立ち上がり（カエリ）

【図2】アンカーhold法

【図1】。あるいは、溝の底や側面に凹みをつくと同時に溝周辺部の鋼を盛り上げ、被せる。凹みに食い込んだ金銀にアンカーの役目をさせつつ、被せた鋼で金銀が抜けないようにする【図2】。

【象嵌の分析視点】

象嵌技術のキーポイントは、金、銀、銅線を嵌め込むための溝を彫ることにある。したがって、どのような工具を用いて溝を彫ったかを明らかにするのは、古代における象嵌工人の系譜を把握する上で、重要な手掛かりになれると考えられる。

【古代日韓の象嵌技術の伝播と意味】

5 世紀前半に本格的に登場する日本列島の象嵌技術は、百済や加耶などの朝鮮半島の技術を積極的に導入しようとした結果がみられる。